

聰

才人尚生

明治
39 2 1
肉交

存
競爭之
益

要
素也

為
方針

極
到
點

序

文明ノ進歩ト共ニ耳ノ使用漸ク繁ク、就中都市ニ在テハ街衢ノ雜鬧車馬汽車電車ノ喧騒耳ニ喧シキノミナラズ、戦勝ノ餘榮、都市ハ亦其面目ヲ改メ、街路石ヲ敷クニ至レバ、其喧シキコト更ニ一層ノ甚シキモノアラシ、其他職業上電話交換手ノ如キ、鐵工場工夫ノ如キ、間斷ナキノ音波ハ痛ク聽官ヲ疲勞セシムルモノトス、然リ而シテ耳ノ使用多ク刺戟加ハルニ從ヒ、耳ノ疾病ヲ招クコト多キハ理ノ當ニ然ルベキモノナリ、耳ヲ保護シ耳病ヲ治スルノ法、須臾モ等閑ニ附スベカラザルナリ、

今井亥三松君茲ニ見ルアリ、耳科專修ノ知識ト多年ノ
 經驗トニ由リ、要ヲ摘ミ簡ニ就キテ耳科衛生書ヲ編述
 シ、世人ヲシテ釋然會得スル所アラシメントス、予ハ本
 書ノ刊行其時ヲ得タルヲ喜ビ、一言ヲ寄セテ序ト爲ス
 明治三十八年十一月

滿洲陣中ニ於テ

醫學博士 芳賀榮次郎誌

自序

耳の疾病は吾人が想像以外の多數にして、之を實驗に
 徴するに通常三人中一耳は多少聽機を損し、精密なる
 聽力試験を行ふに聽覺異常を認むるもの眼病よりも
 遙に多數なるを認む、然れども耳病は精確なる診斷と
 適切の豫防法を行ふに於ては敢て危険あらずと雖も、
 之を等閑に附し顧みざるに於ては、聽覺を損して聾と
 なり、啞となり或は痴呆に陥り、精神上、發育上、肉體上の
 發達を妨害し、遂に貴重なる生命を失ふもの尠からず、
 世に一般衛生を論ずる著書多しと雖も、耳の衛生を説

くものあるを聞かず、況んや我國耳科の幼稚なるに於てをや、余夙に斯科を修め、日常不幸なる耳病患者に接し、耳科衛生の極めて必要を感じ、卑説淺薄を顧みず、特に注意すべき條項數章を綴り一冊子となし、汎く世人参考の資料に供せんと欲す、本書にして多少裨益する所あらば眞に編者の望外なり。

明治三十八年十二月

於廣陵 編者 識

耳科衛生

目次

頁

第一章 聽器の構造及機能	一
第二章 耳病と諸般の關係	七
耳病と年齢の關係	七
耳病と男女の關係	八
耳病と時候の關係	九
耳病の發する時期	九
耳病と職業の關係	二
耳病と遺傳の關係附註	三
第三章 耳病の徵候	二

聴力障害……………二

耳鳴……………三

耳漏……………四

耳性眩暈……………六

耳痛……………七

第四章 初生兒耳の衛生……………七

初生兒耳の保護……………七

初生兒耳の防護……………九

初生兒強音劇動の危険……………一〇

初生兒寒冒の注意……………一三

幼兒叮嚀蓄積の害……………一五

初生兒入浴時の注意……………一六

初生兒哺乳時の注意……………一七

初生兒耳部掌打及接吻の禍害……………一六

第五章 兒童耳の衛生……………一六

學齡兒童の聴力……………一六

耳内異物の危険……………一四

耳内創傷の結果……………一四

游泳海水浴入浴の注意……………一四

第六章 一般耳の衛生……………一六

耳内創傷……………一六

耳病と飲酒……………一四

耳病と喫煙……………一五

耳病と藥劑……………一五

耳の洗滌法……………五
 聴器の人工補助……………五
 第七章 耳病と他疾患……………六
 傳染病と耳病……………六
 眼病と耳病……………六
 鼻及鼻咽腔疾患と耳病……………六
 齒牙疾患と耳病……………六
 消化器疾患と耳病……………七
 泌尿器疾患と耳病……………七
 梅毒と耳病……………七
 第八章 耳病の注意……………七
 目次終……………七

耳科衛生

第一章

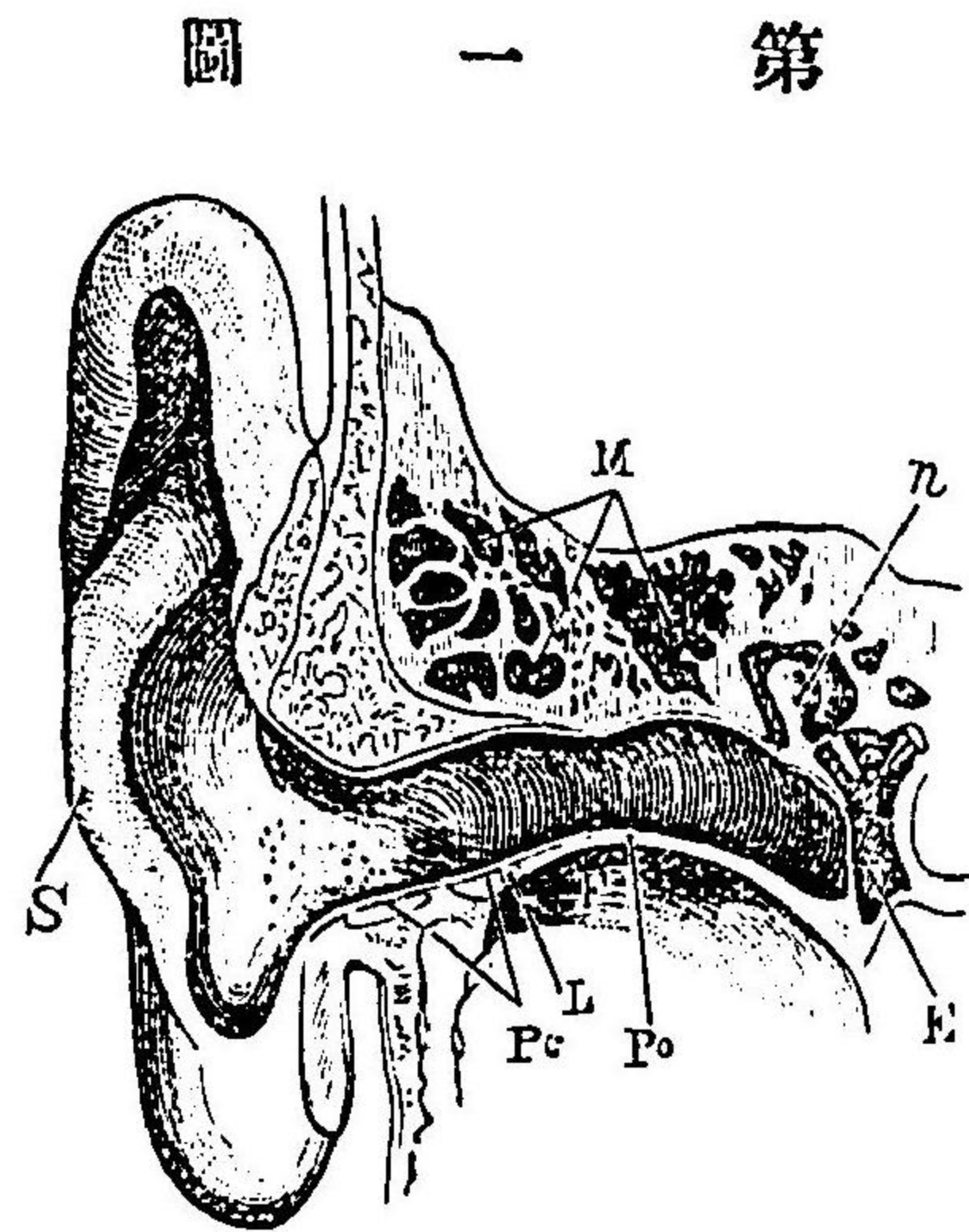
聴器の造構及機能

今井亥三松編述

耳は頭蓋の兩側顳顬骨中に在つて外耳、中耳、内耳の三部分より成る。

外耳は耳翼、外聽道より成り、耳翼は音源の何れの方向にあるやを識別するものにして、外聽道は耳輪の前部より起り、稍彎曲せる喇叭狀管にして、外三分一は軟骨、内三分二は骨質より成り、外孔に細毛ありて、小蟲、塵埃の侵入を防ぎ、音響の波動を其壁に反射して、鼓膜に達せしむ。故に若し外聽道閉塞するときは聴力を妨ぐると論を俟たず、鼓膜は外耳と中耳の境界をなす薄膜にして、外聽道より導かれたる音響を受けて

顫動し、順次槌骨、砧骨、鐮骨の小聽骨に傳搬せしむるの用をなす、鼓膜は一朝不意の劇烈なる音響を受くるか、或は異物、不潔物蓄積等に依て刺



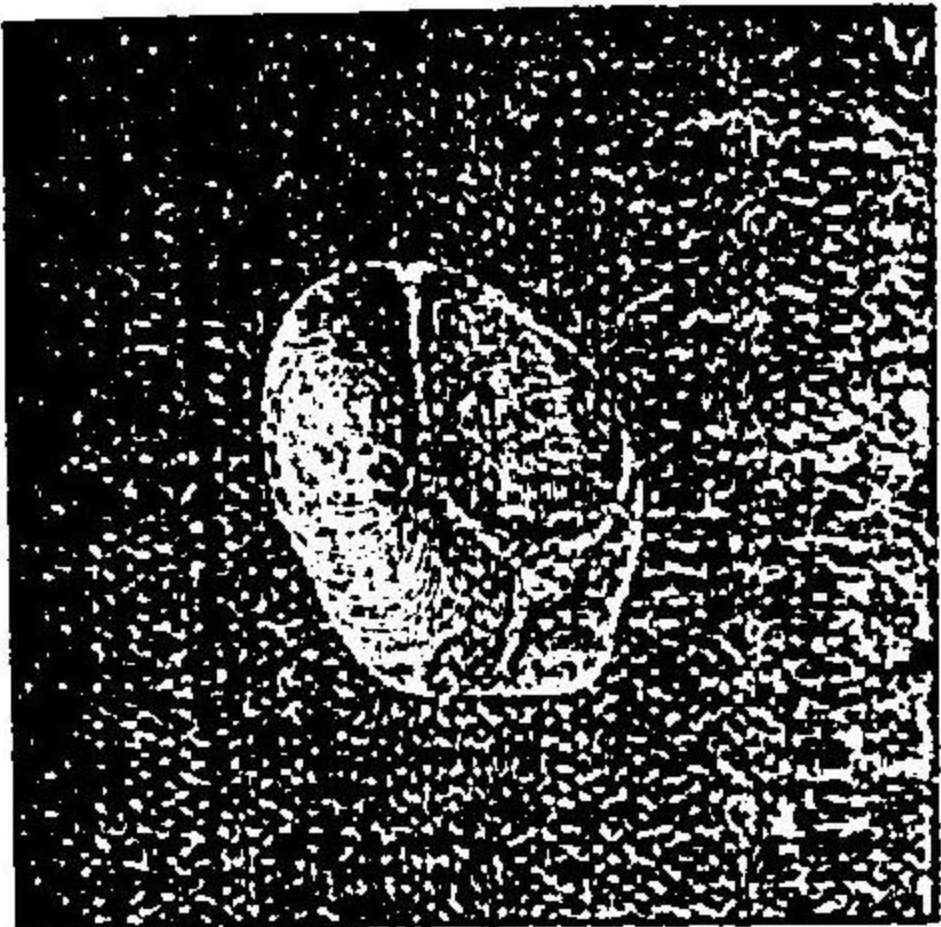
外聽道より中耳に至る長軸後面
E 鼓膜
F 下顎關節に對する截痕
n 中耳
L 硬骨部及軟骨部の皮様連合
M 乳嘴蜂窩
Pc 軟骨部
Po 硬骨部
S 耳翼

戟を受くれば極めて損傷し易きか故に常に大切に保護するを緊要とす、若し鼓膜肥厚するときは顫動し難きを以て聽力を減じ、鼓膜穿孔或は裂孔あるものは聽力を

を障害すること甚だし。

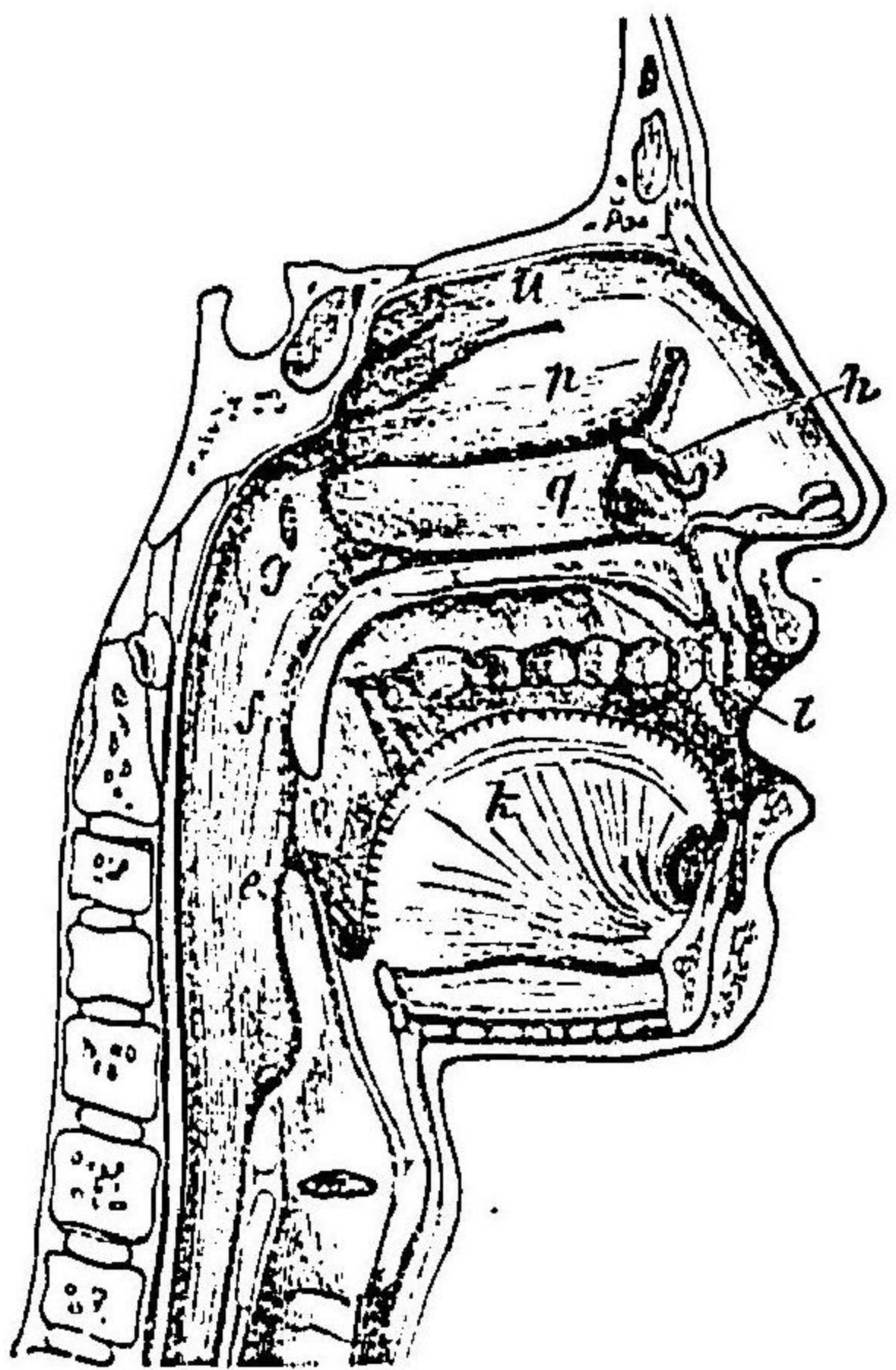
中耳一名鼓室は顫顫骨岩様部と鱗狀部の間に存する骨壁の小腔洞にして、乳嘴蜂窩と交通して空氣量を増し、以て鼓膜に自由の顫動を得べ

第 二 圖



鼓膜 一端は鼓膜の内面に接し、鐮骨の基底は卵圓窓に密着し、一と度び音響の耳中に入りて鼓膜を振動するや、三個の聽骨に音波を傳搬し、鐮骨基底は卵圓窓より内耳に傳達す。

第 三 圖

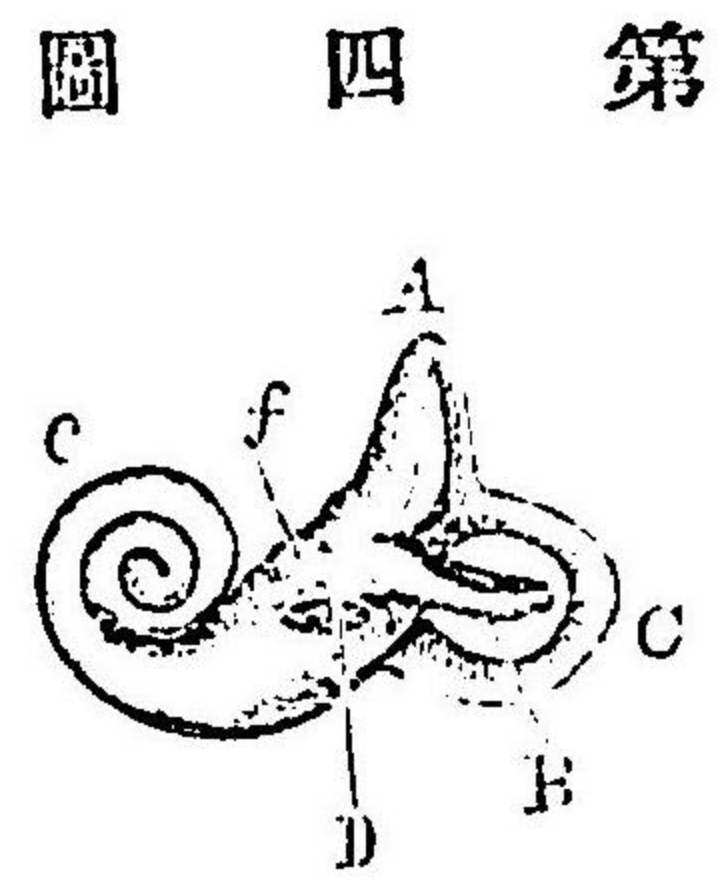


鼻及鼻咽腔と歐氏管との關係
k 舌
h 鼻腔
g 歐氏管
l 硬口蓋
f 軟口蓋
u 上甲介
p 中甲介
q 下甲介
e 會厭軟骨
中耳は長さ一管を以て咽頭の側壁に開口す之を歐斯多侖氏管と云ふ、其管は中耳に近き三分一は骨より成り咽頭

に接する三分二は軟骨より成る、軟骨部は常に閉鎖して嚙下時に方りて開大して中耳内の氣壓と外氣の壓力を常に均等ならしめ且つ顫毛上皮に由て不斷中耳内の分泌物を排除するの用をなす、歐斯多僱氏管（略して歐氏管と云ふ以下倣之）は其流通と不通に至大の關係を有し、一朝歐氏管閉鎖し空氣流通を妨るときは、中耳内の氣壓減少し鼓膜内陷し其壓差を補充せんが爲め滲出物を生し之を排除するの道なく漸次滯留して重聽を來たす、又咽頭腔内より歐氏管を経て種々の微菌竄入して中耳の化膿性疾病を誘起し遂に腦内に波及し聾となり、嘔となり、不幸の轉歸を取るものなれば、常に口内咽腔を清淨に勉め、鼻咽腔疾病に侵されざる様注意すべし。

内耳一名迷路は顛顛骨岩様部中に於て骨様迷路に由て密に圍擁せらる、骨様迷路を前庭、蝸牛殼、三半規管に區別し、前庭は中耳に接して卵圓

窓を有し鑿骨の基底に接合し其下部に正圓窓ありて第二の鼓膜に依て共に中耳内の空氣と迷路水とを分界す、骨様迷路の腔洞内には外淋

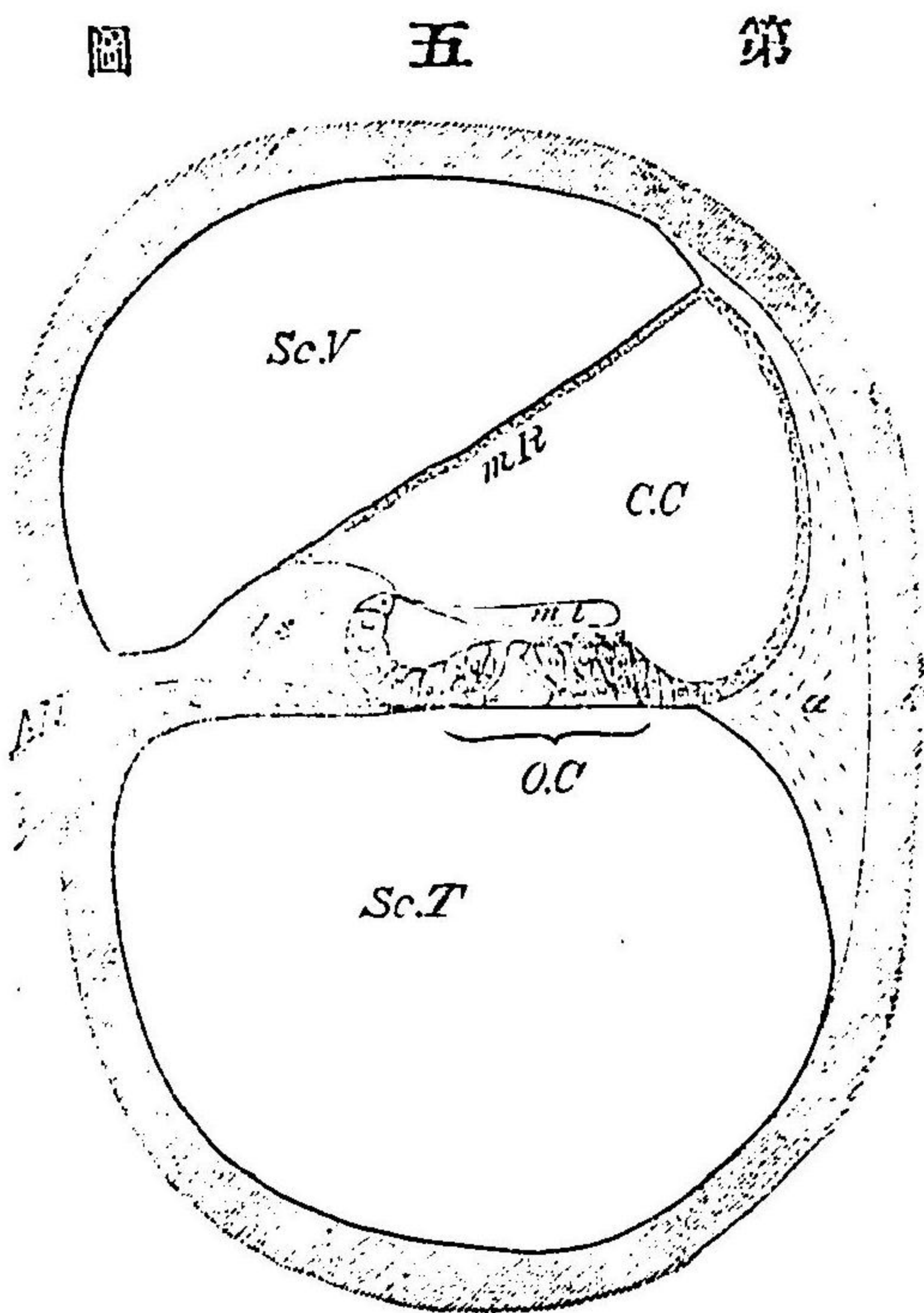


迷路
A 上半規管
B 外半規管
C 下半規管
E 蝸牛殼
f 前庭
D 卵圓窓

巴と稱する液體を以て充盈せられ、液中に同形の正圓囊、卵圓囊及膜様蝸牛殼管、膜様三半規管等あり名けて膜様迷路と云ふ、内に内淋巴を有す、膜様蝸牛殼管は連合管に由て正圓囊に連り、卵圓囊は三

半規管に移行す、膜様蝸牛殼管は骨螺旋板基板に由て二道に分れ、其下道は鼓室道にして第二鼓膜に由て中耳と分界し、上道は前庭道にして前庭と交通す、上道はライヌネル氏膜緊張して更に小管腔を成す、是れ蝸牛殼管にして基板上に蝸牛殼神經の末器、コルチ氏機關を裝置す、今外部より音波の鼓膜に傳達するや、鼓膜の振盪を受て槌骨、砧骨に傳へ

鏡骨基底は卵圓窓を壓し其顫動は迷路内の淋巴液に波及し蝸牛殻基
上に排列する聽神經末器に傳達して之を顫動せしめ聽神經中樞に感



第五圖
蝸牛殻橫断面
α 螺旋靱帶
CC 蝸牛殻管
An 蝸牛殼神經
Sc.T 鼓室道
Sc.V 前庭道
ml ライスネル氏膜
OC コルチ氏機關
ml コルチ氏膜
知して音響を聴收するものなり、斯の如く聽器は精密にして複雑の構造を有し、從て

其作用の如きも極めて細密靈妙不可思議所詮小冊子の盡す能はざる

所なり、唯其要領を述ふるのみ宜しく圖畫を参照すべし。

第二章 耳病と諸般の關係 耳病と年齢の關係

佛國ホンナフオント氏の報告に依れば初生兒より學齡兒童に至る間
の耳病は聾を除くの外は多くは治癒するものにして、十五歳より三十
歳までは三分二治癒し、漸次年齢の長するに従て益々治癒を困難なら
しむと、嘗てベツオールド氏は小兒耳病の過半数は歐氏管の疾病に起因
すと斯の如きは世人か想像する幼者は聽管の薄弱なる爲めにあらず
して、此時期に於て屢々發する鼻及鼻咽腔疾患、傳染性熱性病及該部を
襲ふ全身病より誘起し易きが故に、此期は尤も注意して系統的に耳科
病を檢索すること極めて必要なり、神經性耳病は小兒は六九%、大人は

耳病と諸般の關係 耳病と年齢の關係

九三・一%なり、ピユルクネル氏が耳病患者十萬人に就て調査したる成績に依れば

外耳病

中耳病

内耳病

大人 七三・三八%

五一・八%

六七・〇%

小兒 二六・二%

四八・二%

三三・〇%

にして、大人の外耳病は小兒の三倍、中耳病は同數、内耳病は殆んど小兒の二倍なり。

耳病と男女の關係

男女兩性と耳病は重要な關係を有す、ヘッセ氏の調査に依れば大人に於て男子六三・一、女子三六・九、小兒に於て男子五一・七、女子四八・三の割合にして、諸般の綜合的統計に依れば男子と女子は三と一の比例なり、

之れ男子は女子より總ての原因に遭遇すること多ければなり、然れども小兒にあつては其差少なし。

耳病と時候の關係

一般に耳病は春冬の二期に多くして夏秋に少し、ピユルクネル氏は二月より六月迄及七月一月は一%、八月より十二月迄は六%にして、最も少なきは夏秋の終り、最も多きは冬期の終り及春期の初めなりと云へり、斯の如く耳病と時候の關係大なるが故に、此時期に於ける呼吸器病若くは傳染性熱性病は極めて注意し適當の豫防法を行ふこと尤も緊要なり。

耳病の發する時期

耳病の多く發生する時期は初生兒より春機發動期に至るの間にして、
ビユルクホル氏の統計に依れば左の如し

年齢	男	女
一歳	二五	四〇
二歳	三五	四九
三歳	三五	四〇
四歳	三〇	四〇
五歳	二四	四三
六歳	三〇	三七
七歳	二八	三六
八歳	三四	三七
九歳	一八	三三

斯の如く幼者より漸次年齢の増加するに従て漸次減少す、特に學齡兒童に多き所以は、此時期は屢々鼻及鼻咽腔疾病竝に氣管及肺疾病を伴ふ全身病は屢々鼻咽腔を侵襲し、特異の傳染病毒を歐氏管に波及して中耳の疾病を惹起し易ければ、此期は尤も注意して精密なる耳の検査を請ひ且つ速に治療を施すべし。

耳病と職業との關係

耳病と職業とは重大なる關係を有し、日常劇烈なる音響を聴く職業、即ち砲兵、機關手、運轉手、鑛夫、火夫、鍛冶職、石工等は屢々鼓膜穿孔を生じ或は聽神經末梢に障害を起して一時重聽を來たし或は迷路組織を侵して全く聾に陥ることあり。

刺戟性の塵埃に觸接する職業、即ち鑛夫、磨粉業、掃除夫、石工等の如き始

終微細なる塵埃は叮嚀と結合して外聽道内に蓄積刺戟して外聽道及鼓膜の炎症を發し、遂に鼓膜穿孔慢性化膿性中耳炎を起す、而已ならず塵埃は呼吸器を刺戟して鼻咽腔、喉頭、氣管枝の加答兒を惹起し、之より中耳に傳搬して聽覺を障害す、千八百七十六年レーモンド氏は鉛及其他化合物を使用する職業は劇甚なる聾を起すことを記載せり、要するに總ての職業は頗る寒冷と濕潤に冒され易きが故に、屢々鼻咽腔加答兒を起し漸次歐氏管加答兒及び中耳炎に罹り易し、就中鐵道業者は天候を厭はず寒暑に冒觸するのみならず、常に連續せる劇烈なる音響に接するものなれば、之を豫防せしむる爲め常に綿花を外聽道に密栓して直接の強音を避けしむべし、是等就職の始めは精密なる耳鏡検査を行ひ絶えず聽力検査を持續し、耳鳴、重聽、眩暈等を發すれば直に原因たる職業を脱せしむべし、然らば諸症漸次緩解し若くは治癒するを得べし、

要するに諸種の職業の爲めに重聽の加はるものは速に其業務を轉ずるにあらざれば效力なきものとす。

耳病と遺傳の關係附聾

聾啞とは音響に感受性なく談話の能力を消失せし者の合併症にして耳疾患の症候若くは續發症と見做すべきものなり、其聽官機能を全廢するを聾と云ひ、語官の機能を廢絶するを啞と云ふ、聾啞に先天性と後天性の二種ありと雖も遺傳に依て後天性に起ること極めて多し、トリチエ氏は八百九十五人の耳病患者中二百三十三人(四人中一人)モース氏は中耳疾患百人中三十七人、ベッオールド氏は五百人の中耳患者中三十四人、ピユルクネル氏ハ慢性化膿性中耳炎患者中一四%は遺傳なりと報告せり、グラメル氏は一家十一子中男六人は耳聾にして女五人は

健全なり、又一家八人の男女悉く聾せりと報じ、金杉博士は一家四子中三子は全聾にして僅に一子のみ尋常の聴力を有するものを實驗し、ハルトマン氏は夫婦先天性聾あるもの五子を擧げ四人は聾啞の女子にして一人は健全なる男子なりと云へり。

父母に精神病、酒精中毒、結核其他種々の虚弱状態あるときは子孫に聾啞を遺すことは一般輿論にして、ワイルト氏ミゲエ氏は聾啞は母より遺傳すること多しと云へり、又男子は女子に比し其數多し、ハルトマン氏は男百人中女八五一人、シマルツ氏は男百人中女八五六人、ワイルド氏の調査に依れば先天性の聾啞は男百人に付女七四五人、後天性聾啞は男九十三人に付女九十六人の比例なりと、又同氏は年齢と聾啞の關係を調査せしに五百〇三人中百二十人は二歳以内百九人は三歳乃至四歳の間にして年齢の長するに従ふて其數を減ず、今左に先天性聾啞

と後天性聾啞の比較表を掲ぐ

國名	年 號	調 査 人	先 天 性	後 天 性
ボムメルン	一八七四ヨリ 一八七五マデ	ワイルヘルン氏	五九二	一〇三一
エルフルト	一八七四ヨリ 一八七五マデ	ハルトマン氏	一六八	九九
佛 蘭 西	一八七六	同 國ノ 調 査	一六一二七	五二六八
サ ク セ ン	一八八〇	シマルツ氏	六三六	六四九
プロエセン	一八八〇	同 國ノ 調 査	九四六八	七一九六
エルランド	一八八一	同 國ノ 調 査	三〇九二	七五三
シヨトランド	一八八一	同 國ノ 調 査	一〇七八	一〇六四
ノルウエゲン	一八八六	カツヘルマン氏	九三三	八八五
總 數			三三〇九四	一六九四五

右の表に依れば後天性聾啞は先天性聾啞の半に過ぎざるを知るべし、近親血族結婚の害は早婚より甚だしく常に不妊流産を起すのみならず

す産兒は腺病、結核、精神病畸形を招致し、血族結婚の聾啞に關係あることはブージー氏は二五%、ミトシエル氏は六%、ハルトマン氏は八%、ミギンド氏九〇五%、ウイルヘルム氏は六四%、其内一七七%は先天性のものなることを報告し、遠山博士は血族結婚の父母(共に聾六子中悉く聾し十孫中九孫は聾、一孫のみ聴力を有し曾孫三人中二人は聾一人は啞なる一族を報告せり、恩師金杉博士は本邦に於ける聾啞と結婚との關係に就き調査したる報告を引證せんに

盲啞學校統計表

聾啞總計二百二十六人内兩親血族結婚間に生れし者五十人(即ち二二・二%)

血族結婚の種類

叔父と姪

一組

從兄弟姉妹	三十三組
再從兄弟姉妹	七組
從兄の娘を妻とする者	六組
遠き血縁の者	二組
東京耳鼻咽喉科醫院調査	
聾啞總計百八十四人内兩親血族間に生れし者三十五人(即ち一九五%)	
血族結婚の種類	
叔父と姪	三組
從兄弟姉妹	二十四組
再從兄弟姉妹	四組
遠き血縁の者	四組

以上の統計に依れば血縁愈々近きに從て聾啞の關係愈々甚だし豈に恐れざるべけんや。

聾啞は如何にして先天性に遺傳するもの多きかは試みに東京及京都盲啞學校の左の調査表に依て明なり。

東京盲啞學校調査聾啞の原因

先天性聾啞七十五人、後天性聾啞中腦膜炎三十二人、急性中耳炎十七人、打腦十三人、外耳炎十三人、麻疹五人、神經過敏三人、流行性感冒三人、腦瘡二人、疫咳二人、外傷二人、實扶的里一人、腦膜腫瘍一人、心臟病一人、種痘熱一人、腦水腫一人、痘瘡一人、熱病一人、不詳二十一人。

京都盲啞學校調査聾啞の原因

先天性聾啞九十四人中遺傳十二人、近親結婚三十一人、中耳炎七人、内耳病四十四人。

後天性聾啞三十四人中、腦疾患六人、腦振盪七人、小兒麻痺一人、腸チブス一人、麻疹四人、丹毒一人、熱性病二人、耳炎三人、驚風一人、不詳八人。

聾啞を豫防するに最も必要なるは血族結婚禁止にして前述の統計に依て明了ならん、余は斯る弊害をして速かに禁止し豫防の方法を實行せんことを望む、父母の攝生も亦豫防上重大の關係あるものにして過多の飲酒、精神過勞、梅毒等は頗る注意を要す、初生兒は保育者は感冒を防ぎ腦の疾患、急性傳染病に侵されざるにあり。

幼時既に耳病に罹る時は速に治療を加ふること要用にして、幼兒凡七歳以下のもの聽官の機能を失ひ聾となるときは言語發達不完全となるを以て必ず聾を兼ね聾啞となり易し、故に保育者若し幼兒の音響及談話に感覺なきを推知する時は直ちに耳科醫の診断を受くべし、何となれば既に聾啞と見做たる患者は屢々適當の治療に依て恢復したる

實例少なからず、又聾啞と雖も多少の音感と發聲を成し得べきものにして、之を統計に徴するに全く聽覺を失ふもの六〇・二%、音波のみを感じ母音を解するもの一一・四%にして後天性のもの六八・四%、先天性のもの四二・二%なり、又保育者聾者か單語を連呼するを以て聾者にあらずと誤認することあり、斯る單語は口唇の運動に依て多くは覺知するを得べし。

幼兒聾に陥り最早救治の道なきものは既に習得したる言語を復習する事に勉むべし、何となれば幼時聽覺を失ふ時は言語機能の發達不全なるを以て聾啞に陥り易ければなり、然れとも十四五歳に至れば聽覺を失ふも言語機能の發達完全なるを以て濫りに語言機能を障害するものにあらず、最早聾啞と決定したるものは聾啞教訓法を以て教訓するの外なし。

第三章 耳病の徴候

聽器は獨立の機關にして殆んど他の五官の補助を受けずして其機能を全うし、言語は聽官に由て自由ならしめ、發音は言語と一致増進する者なれば、一朝聽器に異常を呈する時は聽力障害、耳鳴、耳痛、眩暈、悪心、嘔吐、頭痛、頭重、神思不安、發熱等の症狀を呈して、夜間安眠を妨げ智力を害し精神異常を來たし甚しきは自殺を企つに至る、斯の如き症狀の一部を呈する場合は速に精確なる聽覺試験と耳鏡検査を行ひ迅速に適當の治療をなさざるべからず。

聽力障害

聽力障害は一定の音響を自己の聽官に感受し能はさるものにして、或

は異様に感じ或は感受を減じ若くは過度に感受するもの、總稱にして左の如く種別せらる。

(一)聴覺過敏 常に音響を鋭く感受するものにして、甚しきは耳痛を感ず、多くは腦疾患、神經家殊に「ヒステリ」患者に於て見るも甚だ稀なり、嘗てルセエ氏は顔面神經麻痺患者の音樂を過敏に聴取せるを報告し、ポリッチエル氏は全聾に於て聴覺過敏を發せる者を實驗せり、聴覺過敏は普通の音響を過敏に聴取するあり、二三の音響に止まるあり或は雜音なるありて一定ならず。

(二)錯聽 音波の方向を誤聽して前方の音響を後方、左方の音響を右方と誤るが如し、又錯聽は音響を錯雜に聴取するものにして、多くは中耳及迷路の諸病に發す。

(三)復聽 音源單一なるも重複に感受するものにして、其復音明亮なる

あり甚だ幽微なるありて一定せず、復聽は迷路、聽神經若くは中樞の疾患に由て起ること多し。

(四)ウキルリジ 錯聽 重聽者常に汽車馬車の進行中又は街路の騷擾なるときは反て能く音響を聴取するものにして、多くは中耳及聽神經の疾患に起因す。

(五)獨聽 自己の言語は高く強く感ずるが故に常に低語にあらざれば發音する能はず、甚しきは發語に際し耳痛を感ずるものあり之れ常に歐氏管開大して音波の強く鼓膜を振動するに因る、然れども屢々遭遇すべき症にあらす。

耳 鳴

耳病患者の多數は耳鳴を伴ふものにして、耳鳴は耳病の症候中聴覺を

損せるより不快を感ず、其性持續するあり間歇するあり極めて微弱にして注意せざれば感ぜざるあり劇甚にして大ひに安眠を防ぐるありて一樣ならず耳鳴の原因は多く叮嚀蓄積、外耳疾患、中耳内空氣稀薄、中耳内滲出物及癢著、内耳疾病、腦充血、貧血、腫瘍、腦膜炎、乳嘴突起、壓迫、氣候天候の變化、齒痛にして多くは重聽を伴ふ種々の耳鳴は精神病を誘發するものにて、是等の精神病は耳病の治癒するに従ひ治するもの尠なからず、殊に突然發したる耳鳴は屢々腦疾患及び中耳疾患に因ること多きが故に、速に適當の治療を行ふを良とす。

耳漏

耳の疾患に由て起る分泌物に種々ありと雖も之を總稱して耳漏と云ふ、就中外聽道及び中耳より發生するもの甚だ多し、其他腦内疾患より

漿液を洩すものあり、我國に於ては耳漏を俗に「耳ダレ」と稱へ、幼兒一身の胎毒を耳より漏出し健康を保つにありと歡喜するの習慣あり、何んぞ恐なるの甚しきや、俗間耳漏を治せんが爲め丸藥植物の液汁、油類、乳汁等を耳内に注入するものあり、油類の耳内滴入は管に必要なきのみならず極めて危険なる禍害を醸もすものなり、總て油類は脂肪酸と虞利設林とに分解して外聽道を刺戟し、乳汁は極めて厭惡なる作用を呈す、即ち乳汁は一定時の後ち乳酸酸酵を起し、乳酸桿菌は外聽道を刺戟し、頑固なる炎症を惹起す、殊に是等を點耳する場合の多くは外耳、中耳に疾病の存在する時なるを以て益々猛烈なる刺戟を持續して種々の微菌に好培養基を興へて其發育を助け、漸次炎症を鼓膜、中耳に波及し、遂に内耳の疾患を喚起して其結果聽官を害し聾となり、嘔となり、癩呆となり、稍成長の後ち父母の推知する處となり、耳科醫の治を請ふも最

早如何ともする能はず、甚しきは脳症を續發して不幸死の轉歸を取るもの稀ならず、故に耳漏は注意して正當の治療を施すべし。

耳性眩暈

種々の耳病に併發するものにして常に耳鳴、惡心、嘔吐等を伴ふ、ブルネル氏ハルトマン氏は耳病に發する眩暈の原因を中耳作用に因るものと迷路作用に因るものと腦疾患に因るものとの三種とし、中耳作用に因る眩暈は中耳炎、過劇又は寒冷の洗耳、強力の通氣法及外聽道異物、叮嚀栓塞等にして多くは一時性なるが故に輕易なり、迷路疾患に因るものは比較的多數にして腦疾患に因るものは殊に小腦の疾患に於て見ることも多し、元より一時性のものは豫後良なるも迷路及び腦疾患に因るものは偶々恢復するも屢々再發し聽神經末梢の變化を來し

遂に全聾に陥るものなれば、勉て之れが保護に寸分の懈怠なき様注意せざるべからず。

耳痛

耳痛は多くの耳病に於て殆ど缺くることなし、殊に急性炎に於て然り、其性鈍なるあり劇なるあり間歇するありて一樣ならず、其多くは耳鳴、重聽、乳嘴突起の知覺過敏を伴ふ、耳痛は寒冒、癩麻質斯、貧血、喉頭、耳翼、歐氏管潰瘍、神經炎及神經幹の壓迫即ち鼓室神經、外聽道神經、三叉神經、後頭神經等の神經痛に由る者にして齶齒に因ること多し、宜しく注意を要す。

第四章 初生兒耳の衛生

初生兒耳の保護

初生兒の外聽道は往々兒垢所謂胎兒の皮脂を以て填塞するものなり、此物質滯留するときは外聽道炎を誘發するのみならず屢々鼓膜炎を續發し甚しきは中耳内小聽骨の骨疽を起すが故に細心注意して除去せざるべからず然れども之を除去したるため過度に失する寒冷なる空氣の侵入を豫防するには少量の綿花を外聽道に填塞すべし之れ初生兒の外聽道は短少にして鼓膜は非常に鋭敏なる感受性を有すればなり。

胎兒の中耳は空氣を含有せずワートン氏膠様枕と稱する物質を以て充填せらる、此物質は迷路壁の粘液性分泌物及び茲に發生する「プロトプラスマ」より成り胎兒分娩の時期に達するや一の生理的變化を來たす、即ち初生兒第一回の啼泣は呼氣性空氣歐氏管を通過して中耳に侵入するの際膠様物質は吸收せられ空氣代て其位置を占領し外界に對

する鋭敏の感受作用を發起するものなり、此時期に於て屢々中耳炎を發し終に迷路の疾患を續發して聽力を廢止すること稀ならず、宜しく耳科醫をして初生兒の鼓膜検査を依頼すること頗る肝要なり。

初生兒耳の防護

初生兒の寒冷を防がん爲め洋の東西を問はず頭巾を被らしむるの習慣あり、頭巾の緊密なるは耳翼を壓迫して變形を來たし或は空氣の流通不良となりて皮膚を刺戟し濕疹、膿胞疹、皸裂等を生ず、是等は俗間に「クサ」(頭瘡の事か)と名け胎毒を洩らすものとし、之を治療せば反て胎毒を體内に追込み内巧の爲め種々の障害を來たすものと誤解し自然等閑に委ね遂に恐るべき續發症を發し、不幸の運命に陥るに及んで醫家の診療を請ふもの多し、元來初生兒の耳翼は軟弱にして寒に逢へば凍

傷に罹り、炎熱に逢へば汗疹、濕疹に侵され易し、之を防ぐには夏期に在つては毎日清水を以て拭淨するか或は酒精を布片に浸して摩擦し或は綿花、フネル等を以て耳覆をなし防禦すべし、既に耳翼に疹の發せんとする兆あるときは、専ら清潔に勉め一日數回煮沸したる溫湯を以て清拭し、後ち脱脂綿花、綿紗を以て能く乾燥し亞鉛花、石松子、硫酸、マクネシア、米粉等の撒布を行ふべし。

初生兒強音劇動の危險

初生兒は出産後一二日間は聽官の構造充分ならざるが故に聽覺を有せず、然れとも暫時にして發育完備するものなり、生後一ヶ月を経て尙ほ高度の音響に對し反應なきは先天性聾と想像するを得べし、諸家の研究に依れば初生兒生後三四日にして音響を感じ、第五週日にして雜

音の爲めに睡眠を醒し、第七週乃至第八週に至れば高響に驚き音響を傾聽し、滿三ヶ月にして音源に向て頭首を傾斜し、六ヶ月にして音聲を識別し、第一歳に達せば叱聲に依りて動作を中止し或は泣涕するが如し、之等の障害を避け生理的發達を望むには、劇甚の運動例之は哺乳兒を強く振盪するか若しくは動搖するを禁じ、勉めて高調なる音響を避くべし、元來初生兒の外聽道は極めて軟弱にして感受性頗る鋭敏なるが故に鼓膜を侵し易く、殊に鼓膜は短小なる外聽道空氣の波動を受け、て顫動する菲薄の膜なれば不意の劇動を受くれば聽神經を刺激して疲勞を來たし、鼓膜充血若しくは裂傷を惹起し、遂に聾に陥ること稀ならず、然らば初生兒に於て強大高調にして持續せる音響、汽笛、雷鳴の如きは手掌を以て耳を塞ぎ或は外聽道に綿花を挿入して耳を庇護し、又は濫りに耳邊に口を接し高聲を以て談話する事を慎まざるべからず。

初生兒感冒の注意

初生兒の感冒は耳病に大なる關係を有す、感冒が耳に及ぼす影響は直接と間接の二種にして、直接とは初生兒感冒に罹れば先づ外聽道炎を起し夫より中耳炎、鼓膜炎を起し漸次内耳に波及し機能を失はしめ遂に治すべからざる聾啞となり、甚しきは危険なる腦の疾患を續發して貴重なる人命を失ふに至る、故に初生兒は勉めて感冒を豫防し既に侵されたるものは速に治療を加ふるに於ては斯の如き危険を來すことなし、間接に耳に及ぼす影響は初生兒感冒の多くは鼻及鼻咽腔加答兒を伴ふものにて、空氣は鼻腔を通過して侵入し柔軟なる鼻粘膜に傳染の危険を與ふるが故に、初生兒に於て最も必要なる注意は常に鼻腔の開通するや否やを探知するにあり、如何となれば初生兒の鼻腔閉塞は

左の如き種々の救ふべからざる障害を來たせばなり。

哺乳障害 初生兒は通常鼻呼吸を營むが故に鼻腔閉鎖すれば哺乳困難となり爲めに榮養を缺如す。

疾病の原因 空氣は鼻腔を通過すれば其八〇％は經路に於て殺菌せらる、然るに其閉鎖するに方ては歐氏管閉塞を來たし爲めに鼻咽腔と中耳の換氣廢絶せらるゝを以て中耳は細菌の好適地となり、遂に化膿性中耳炎に罹り宛然不幸の聾啞に陥るに至る。

呼吸器の障害 鼻腔閉塞すれば鼻呼吸廢止するを以て止むを得ず口呼吸に因らざるべからず、爲めに喉頭、氣管支、肺の疾患を誘發し不測の障害を來たす。

精神及發育の障害 鼻腔閉鎖の爲め腦内淋巴管排泄障害を來たし、遂に血行の異常を呈し或は重聽の爲め精神痴鈍となり、從て身體の發育

智育に影響を及ぼす。

嗅覺障害 嗅覺と味覺は親密なる關係を有す、人もし嗅覺に障害あれば従て美味を感じる能はず、人性の不快之れより大なるはなし、然らば初生兒も亦哺乳消化に大關係あるや疑なし。

顔貌の變態 鼻腔閉塞の小兒は鼻翼廣く鼻唇溝消失し所謂獅子鼻を呈するもの多し、其他顔貌を變形せしむるもの尠なからず。

以上の理由に依り初生兒の鼻及鼻咽腔疾患は鼻腔狹窄若くは閉塞を起し之を歐氏管に波及して漸次中耳化膿性炎を續發し其機能を減せしめ、遂に迷路を侵して聽力を失ひ屢々炎症を腦内に波及して遂に救ふ可からざる生命を奪ふに至る、之等を未發に防がんと欲せば須らく初生兒の感冒を避け、鼻及鼻咽腔疾病又は咳嗽噴嚏の如き呼氣の強壓は歐氏管より中耳内に炎症を傳播し或ハ鼓膜破裂及出血を起すが故

に、速に治療を加へ常に顔面を清潔に保持し寒風、烈風、沐浴の際は綿花の小片を外耳に挿入し或は耳を被包すべし。

初生兒耳聾蓄積の害

外聽道は腺の分泌盛にして塵芥等を外部に排除するの作用あり、然れども其濕潤したる耳聾は漸次蓄積して凝塊を生じ遂に外聽道を全閉し、重聽耳鳴、耳痛等を感じるもの頗る多し、耳聾は先天的硬なると軟なるの二種ありて硬者二十に對する軟者一人の比例なり、其多くは子孫に遺傳す、耳聾と外聽道との間隙寛大なれば従て聽覺を損するると小なるも閉鎖の度増加するに従て頭痛、耳鳴、眩暈、耳痛、嘔吐、卒倒等を發す、斯の如きは耳聾其壁を刺戟し或は直接に鼓膜を壓迫して反射的神經症狀を發するに由る、民間耳聾を除去せんと欲し、油類、脂肪、乳汁等を耳内

に注入するの慣習あり、油類及脂肪等は虞利設林と脂肪酸に分解せられ、乳汁は速に乳酸酸酵を起し反て微菌に對する好培養基となり、種々の微菌を發育せしめて炎症刺戟を起し遂に不測の續發症を誘起すること少なからず、故に之を除去するには頗る細心注意を要す、器械的摘出法は一部を除去し得るも屢々外聽道壁を刺戟し反て癰瘡を惹起し、強劇の耳洗法は叮嚀を後進せしむるのみならず屢々眩暈、卒倒を起すとあり、故に極めて除々に殺菌微温水を以て洗出するか或は一%の曹達水を點耳し一定時間の後耳洗を行ひ充分拭淨して毫も水分を止めざるに至るべし、斯の如く連續施行する時は容易に除去するを得べし。

初生兒入浴時の注意

初生兒の身體を清潔に保持せんか爲め屢々沐浴するは我國の美風な

りと雖も、爰に注意すべきは頭部を清洗せんと欲して浴湯中に浸し若くは石鹼及び汚垢塵芥等を混合せる不潔の浴湯を外聽道に浸入するに於ては、忽ち外聽道下壁に沿ひ漸次深部に滲入して外聽道鼓膜及中耳の劇甚なる炎症を惹起す、殊に咳嗽、嘔吐あるときは尤も注意すべし、宜しく初生兒の沐浴時には必ず外聽道に綿花を挿入するを怠るべからず。

初生兒哺乳時の注意

我國の保育者は初生兒啼泣せば授乳、寢臥も授乳、夜間も授乳せしめ敢て一定の時間と分量とを顧みず、濫りに哺乳せしむるが故に、屢々胃腸を傷害し或は種々疾病を惹起す、殊に乳汁は耳に向つて最も厭惡せらるゝものなり、古來俗に「沿ひ臥」と稱し生母、乳母は仰臥せる初生兒を抱

き哺乳せしむる慣習ありて乳兒は遂に乳汁に飽き乳房を放し其乳房より流出する乳汁は外聽道に流入し又屢々乳兒は過剰の乳汁を嘔出し、口角より流溢するときは自己の耳内に侵入して乳酸桿菌の作用に由て酸酵を起し頑固なる外聽道炎を發す、之れに反して哺乳中若し嘔吐咳嗽等を催すときは乳汁は咽頭より歐氏管に傳ひ遂に中耳に這入して劇烈なる乳酸酸酵を起して恐るべき不幸の結果を來たすが故に授乳者は沿臥の慣習を廢し哺乳時間を嚴格にし常に顔面殊に耳邊を清潔に保持する事に勉めざるべからず。

初生兒耳部掌打及接吻の禍害

育兒者が嬉戲に乗じ手掌を以て小兒の頭部又は耳邊を拍打するは吾人の日常目撃する處にして斯の如き場合は外聽道内に劇甚なる空氣

濃厚を來し鼓膜裂傷を起すこと稀ならず是等の惡慣習は戰勝國として嚴に禁せざるべからず尙ほ恐るべきは歐洲に於ける小兒の耳を接吻する常習にして強劇なる接吻は外聽道を真空ならしめ且つ劇甚の震動を起して鼓膜裂傷中耳充血出血等を惹起す我が國未だ斯る惡慣習なきは眞に幸福と云ふべし。

第五章 兒童耳の衛生

學齡兒童の聽力

兒童の聽力は常に教師及醫師の精密なる注意を要す曾てライヒアル川氏は千五十五人の學齡兒童二二二%の重聽者を實驗し、ツイル氏は七百六十七人の學童中三〇%は八メートルの距離に於て通常の談話を聴取する能はず、且つ富家の兒童は聽力佳良なりと報告し、ベッセル

ド氏は千九百十八人の兒童中七九二・五%は健耳にして二〇・七五%は病的なることを検出し、英醫チートル氏は兒童千人中四三%は尋常の聽器を有し五〇%は聽力減少を伴ふ耳病を有し、モール氏は百人中十七人の難聽者を發見し、和辻博士は千五百九十人中聽器疾患二一九%、鈴木貞衛氏は學童四百四十四人中聽器疾患二百二十三人なるを報告せらる、余は廣島市光道館尋常高等小學兒童三百三十六人に聽力試験を施行せしに五十七人(一七%弱)は鼻咽腔疾患にして内十三人は聽力障害あるを發見せり、斯の如く學齡兒童中偶然難聽者を發見したるは甚意外の感なき能はず、斯かる状態なるを以て學童中聽器疾患あるものは幾許あるや知るべからず、其輕症は自然に治癒することあるを以て教師は勿論、兒童自身も輕々に看過するが故に世の父兄は之を等閑に附し、聽力不完全となるか、性情痴鈍の状態を呈するに至り初めて醫療

を請ふが爲め、多くの場合は既に慢性痼疾に變じ最早如何ともすべからず、故に學校醫は常に學齡兒童の耳鼻咽喉検査を嚴密に施行し、教員は不斷兒童の聽力如何に注目し、若し重聽者を發見せば直に父兄に申達して耳科醫の治療を受けしめ、以て難聽者を未發に防ぎ聽覺の機能を幼時より充分に發達せしむべし。

耳内異物の危険

小兒は好て自己の外耳へ異物を嵌入するの常習ありて極めて困難を醸すと稀ならず、硬性のものは小石、珊瑚、鉛筆、菓物核、南京珠、針、硝子片、齒牙、石筆、軟性の物質は紙片、綿塊、穀粒、菓物、豆類、蟲類、殊に蠅、甲蟲、蚤、蠅、蛆、蟲、蟲卵等にして、穀物は多く膨脹し、耳蛆は耳漏患者の耳内に寄生する蠅卵の孵化せるものなり、俗間蒜、葱、丸藥、蟬殼等を治療的に挿入する迷信

家少なからず。

異物の耳内に存するや多くは耳内疼痛、耳鳴、閉塞の感、重聽等を呈し、寄生蟲等は喧噪し屢々眩暈、嘔吐、咳嗽發作を起し、甚しきは呼吸困難、腦膜炎症狀、癲癇様發作、四肢の知覺過敏を發起す、異物の所在は外聽道なるあり鼓膜に接するあり中耳に存するありて一定せずと雖とも、之を除去するには極めて細心注意して緩徐に摘出するを要す、然るに往々耳内異物は素人若は未熟練家は耳の洗滌を行ふか、若くは油類を點耳し、敢て耳内を照檢せずして數回摘出を試み、知らず識らず異物を深部に壓入するのみならず屢々鼓膜を損傷せしめ、甚しきは異物を中耳内に挿入したる例證頗る多し、斯る場合は外聽道は腫脹、疼痛、知覺過敏となり、兒童は手術に懲りたる後にして耳科醫は管に油類を除去するに困難なるのみならず、多くは麻醉藥に依て摘出するか或は手術を要する

の止むを得ざるに至る、故に小兒手を耳に的て若くは疼痛を訴ふる場合は可及的速に經驗ある耳科醫を撰み速かに摘出法を行ふを肝要とす。

耳内創傷の結果

兒童は遊戲中常に耳を弄するの習慣を有し甚た外傷を蒙り易し、殊に耳翼は牽引、打撲、轉倒、壓迫等に依て創傷し、榮養不良の小兒は冬季屢々耳翼の凍瘡に罹り易し、又小兒は耳内の瘙痒を輕快せん爲め不潔なる爪指を以て外聽道を搔き損傷し、或は父母童兒の叮嚀異物を除去せんと欲して屢々創傷を來たすことあり、殊に耳の打撲、接吻、強劇なる耳洗は鼓膜の損傷を來たし、其創傷は忽ち炎症を惹起して化膿菌の好培養地となり従て種々の續發症を誘起す、凡て耳の外傷は安靜と防腐を要

するものなれば、濫りに點耳藥を注入し耳洗滌を行ふは極めて危険にして速に適當の療法を行ふにあらざれば種々の疾病を誘發し、終生治すべからざる聾となり或は生命を失ふの不幸に陥る。

游泳、海水浴、入浴の注意

總て游泳、海水浴、浴湯は頗る注意せざれば液體竄入の爲め耳病の誘因となり、屢々健康の耳は外聽道、鼓膜及歐氏管の疾病を喚起し耳鳴、疼痛、眩暈、聽力の障害等を發し、既發の病耳は病勢を増劇し、慢性の耳疾患を頓に急性炎症に變せしめ、小聽骨を腐骨に陥らしめ或は近隣の骨質を侵し漸次内耳に波及し、遂に險惡なる腦疾患を醸すと稀ならず、海水、河水、井水殊に浴湯は數百數十人を洗滌したる身體の分泌物、垢、汗等を混せる不潔汚穢物にして甚だ危險なり、之を豫防するには入浴、游泳を問

はず常に綿花を以て外聽道を栓塞し、決して潛水、飛込、頭洗を濫りにすべからず、潛水は嚙下の際歐氏管擴張して水の中耳内に浸入せしめ歐氏管炎、中耳炎を起すが故に兒童にあつては鼻腔及鼻咽腔に水の竄入するを防禦すると緊要なり、若し水液外聽道内に滯留すれば浴後直ちに耳を下方に傾けて振盪し、或は卷綿子に脱脂綿花を巻き細心注意して數回水分を拭去るべし、要するに游泳は耳漏あるものは勿論、健康者と雖ども耳の健全なるや否やは必ず耳科醫の確診を得て施行すべし、既に外聽道發炎し疼痛劇甚なるときは速に適當の治療を受くるを穩當なりとす。

ハッソー氏は耳科に於て浴療法の偉效を奏する場合少からず尤も湯治場を撰定するの必要ありと報告せり曰く、
結核性、梅毒性の者は勿論、神經衰弱症、臆躁并に全身衰弱に起因する

耳疾患には特に偉効を奏し、慢性中耳炎に於ても屢々效あり、然れども中耳の硬變性には寸效なし、小兒急性化膿性中耳炎の反覆する者、頑固の慢性化膿性中耳炎に效あり、時として海濱に居住して治するあり、固より浴場に於ける耳科的局所療法は専門家に依頼せざるべからず。

第六章 一般耳の衛生

耳内創傷

耳毛は塵芥、蟲類の耳内に竄入するを保護するものにして、吾國の慣習として多くは耳毛を剃るを常とす、耳孔は知覺過敏、軟弱なる曲管にして堅強なる剃刀等を以て刺戟するに於ては極めて創傷を造り易く、其結果として外聽道炎を發し、漸次中耳、内耳の疾病を喚起す、殊に多くの

傳染病は耳内より感染すると少なからずと云ふ、然らば濫りに耳毛を剃るは衛生上耳毛の目的に反するものなれば之を放任するを適當とす、外聽道は屢々疔瘡、發疹等に依りて搔抓する爲め髮針筆、縫針、耳ヒ、莖等を以て損傷す、又電撃、發砲、耳部掌打、擊劍打撲、強劇なる耳の洗滌は外聽道の空氣を稠厚ならしめ、遂に鼓膜を裂傷せしむ、其他劇き嘔吐、噴嚏、咳嗽、通氣法、縊死は往々中耳内の空氣稠厚となり、稀には鼓膜裂傷を起すとあり、耳部の打掌は人を耻辱し、或は鬭諍の場合に於て頗る多し、本邦に於ける擊劍は今や大いに廢棄せらるると雖ども往々擊劍に因する鼓膜損傷を實驗す、此種の外傷は常に右手を應用するを以て左耳に發す、金杉博士は一年間八人中六人は右耳、二人は左耳なるを實驗し、余は最近擊劍に因する鼓膜裂傷患者五人中左耳三人、右耳二人を見たり、世の人耳部掌打は頗る謹慎すべきとなり、歐米に濫用せらるゝ耳の接

吻に因る鼓膜裂傷は我國に行はれざるは頗る幸福と云ふべし。顛を打撲するときは外聽道壁は下顎關節の衝突に因て骨折し屢々外聽道の出血を來たす、頭蓋底の骨折に依て聽覺の侵さるゝは迷路及中耳を損傷するに因る、顛顛骨の骨折は内聽道孔及迷路前庭を損し顔面神経管を傷く、總て外傷に因する骨折は其大小に論なく外耳の出血を認むるものにして外聽道なるあり中耳なるありて一定せず、外傷後鼓膜に裂傷ありて出血久しきは顛顛骨骨傷にして、漿液を洩すは多くは硬腦膜の破裂なべくし。

鼓膜の外傷は常に裂傷を伴ふ、元より外傷の程度に因て一樣ならずと雖も、適當なる加療を施すときは速かに治癒に赴くべきも、一朝其の處置を誤るに於ては化膿性中耳炎に轉じ遂に炎を内耳或は腦膜に波及し救ふべからざる危険症を續發して遂に全聾に陥るものなり、故に耳

内の外傷は身體を安靜にし、濫りに耳の洗滌法を行ひ點耳藥を避け感冒を防ぎ嘔吐、噴嚏を豫防し、患耳は消毒綿花を充塞して直ちに耳科醫の治療を受けるを要す、聽器外圍の骨折は豫後甚だ不良なりと雖も適當の療法を施すに於ては、屢々眩暈、耳鳴等を貽して輕快するもの少なからず

耳病と飲酒

酒の主成分は酒精にして衛生上毫も人身に益するとなし、片山醫學博士の所論に曰く古來酒は健胃營養の效ありと云ふも只に消化を助くる效なきのみならず毫も營養に效なし、(一)酒は身體を溫暖ならしむと云ふも反て體溫を減少せしむ、(二)酒は一時精神作用を爽快活潑ならしむるが如きも之を分析すれば思慮淺薄となり怒り易く粗暴となる、(三)

暴飲酒の結果身體組織中の蛋白質を侵し、腦、心臟血管、肝臟、脾臟の細胞を侵し、終に不治の疾患を惹起せしむ(四)酒は種々の遺傳病を子孫に貽す(五)最と豈に恐れざるべけんや、飲酒の耳に及ぼす影響は種々ありと雖も先づ酒の體內に入るや直接に鼻腔、口腔、咽喉の粘膜を刺戟し、過量なるに於ては一時腦充血、心悸亢進、頭重、耳鳴を發するも醒覺するに従て漸次恢復すべし、然れども慢性酒精中毒に至つては中耳、内耳の疾患を誘發し、遂に聾に陥り甚しきは腦疾患を起して斃れ、其の影響を子孫に傳ふるは争ふべからざる事實にして種々の精神病、盲、聾啞等の多くは酒客の後裔に見る、嘗て英國に於て白痴百人中四十八人は飲酒家の遺傳なりと云ふ、今や我邦酒に重税に課しつゝあるに係らず之を禁止する方法なきは甚だ遺憾にして余は絶對的に飲酒禁止令の發布を望むものなり。

耳病と喫煙

煙草は、ニコチンの他、硫化水素、炭酸、靑酸等の有害成分を含有し、之を喫煙すれば先づ咽喉に搔痒、灼熱の感を覺え、唾液分泌増進し、中毒症狀を發すれば胃部疼痛、頭痛、頭重、眩暈、惡寒、痙攣、視力障害、味覺、聽覺を損じ、遂に自己一身に止まらず、其害毒を子孫に及すと稀ならず、ホルリンケル氏は病體解剖の結果、喫煙家は咽喉疾患なき者殆んど稀なりと明言し、リック氏は煙草濫用の聽官に及ぼす影響と題し、「ニコチンは聽官に障害を來すものにして殊に中耳硬化症に甚だ害あり、ニコチンの爲めに起る聾は腦神經並に内耳に及ぼす直接の作用に依り起るものなり、蓋し交感神經を刺戟し、血液の循環を害するが爲めなり、故に幼者並に中耳硬化症の者及其傾向を有する者は嚴に喫煙を禁すべし、我邦都鄙の

別なく貴賤老幼を問はず喫煙の弊風行はれ、殊に幼者喫煙の如きは明治三十三年四月喫煙禁止令を發布したるに係らず、今尙ほ制裁を潜り喫煙を濫りにせるものあり豈に遺憾の至りならずや、喫煙の害たる上に述るが如く將來有望の少年をして其健康を障害すること頗る多し、而して煙草の耳に及ぼす影響は直接と間接を問はず終始刺戟して、直接には煙草中に含有するニコチンの爲め脳中枢を侵して重聽を惹起し漸次聾に陥るに至る、間接には殊に鼻煙の慣習に依て鼻咽腔加答兒を發し漸次歐氏管より炎を中耳に波及し遂に聽神經を鈍麻せしめ或は恐るべき重聽を起す、余は豫防の一策として幼者は喫煙を嚴禁し成年者は日常煙草に品質ニコチン含量少なきものを選び務めて喫煙の量を制減せば衛生上多少其害を除くに至るならん？

耳病と藥劑

藥劑の中毒に因て内耳に障害を醸すものは沃度加里、莫爾比涅、鉛、砒石、水銀、硝酸銀、コロホルム等にして殊に楊皮酸、規尼涅に依て起るものを屢々實驗す、此等の藥劑は必要にして聽器に障害あるを顧みず汎用せらるゝは止むを得ざる事にして遂に聽神經機能の變常を來すに及て後服を休止するを常とせり、其中毒作用は先づ迷路に充血を起し耳鳴、重聽、眩暈の症狀を發するや直ちに後服を廢止すれば一時に諸症消散するも斯の如き作用を輕々看過し藥劑服用を持長するときは危険なる迷路の溢血を起して頑固の耳鳴及び聾を續發するが故に尤も注意せざるべからず、其他製鉛所の職工、畫工、活版製造者、白粉中に混和したる鉛又硝酸銀は白髮に混染せらるゝが故に之等を永く使用するに

於ては屢々慢性中毒に罹り耳鳴、重聽を發す、又砒石は一種耳内の潰瘍を起すこと稀ならず宜しく注意を要す。

耳の洗滌法

耳を洗滌するの目的は耳内を明瞭に検査する時又は治療を加ふる時若くは生理的病的分泌物等を除去する際に應用せらるゝものにして、古來我國の習慣として耳病の原因如何なるを問はず點耳法と耳洗法の二策の他に方法なしと想像し濫りに耳の洗滌を施すの傾あり、元來耳の疼痛等は主として安靜を守り消炎法を施すべきに寒冷又は温に失する液體にて強劇なる耳洗法を行ふに的ては反て疼痛を増進するのみならず其刺戟は外聽道炎、鼓膜炎を惹起し殊に鼓膜の穿孔を有するものは液體中耳内に貯溜し益々病勢を増悪ならしめ遂に危険の疾

病を誘發すること稀ならず。

必要に的て耳を洗滌する場合は細心注意して徐々に外聽道の上壁又は側壁に沿ひ均等の壓を用ひて洗滌し決して急激なる力を加ふべからず殊に洗滌液は寒冷又は温熱過度に失すれば益々炎症を増劇し反射的に頭痛、眩暈、失心を起すが故に攝氏三十八度内外に加温するを適度とす、耳を洗滌したる後は水分を除去するが爲め患耳を下方に傾け殺菌綿花を卷綿子に固卷し耳内を窺ひつゝ、數回充分に清拭し乾燥せしむべし、若し水分残留するときは危険の續發症を起すが故に耳洗法は頗る謹慎注意を要す。

聽器の人工補助

諸般の聾者、重聽者をして音響を強盛ならしめ且つ音響傳達を佳良な

らしむる目的を以て補聴管及人工鼓膜を創製せりと雖も、世人が信ずる如く眼鏡が視力を補助するが如き確實なる效力を有するものにあらず、何ぞ徒らに誇大の廣告に迷惑され彼等滿着手段の奸計に陥らざる様注意する事肝要なりとす。

補聴管は重聽の高度なるものに於て音響を強く集合して聴管に達せしめ以て聴力を助け對話を容易ならしむるものにして、恰も耳に直接談話するの構造なり、其種類頗る多しと雖も、金屬硬護膜製なり其形状は漏斗狀喇叭狀、茶碗狀を主とし扇、杖、傘等の装置をなし携帯に便なるものあり、尤も補聴管を撰ぶは重聽の度と原因に注意するを要す、殊に補聴管は其形小なるに従て效力薄きものとす、故に重聽者は常に耳科醫の精密なる診察に委ね適當なる補聴管を使用せば多少益する所あるべし。

人工鼓膜は何れの耳病にも適用するものにあらず、必ず感受性装置に異常なく慢性中耳炎の爲めに鼓膜穿孔し音響傳達に障害あるもののみ必要あり、總て之を挿入する以前は充分中耳の防腐的治療を施し、毫も化膿の恐れなきに至て施行するを適當とす、若し膿の分泌多量なれば其刺戟に因て益々中耳内の分泌を増進せしむるが故に、一時人工鼓膜の使用を中止するの止むを得ざるに至るべし、また人工鼓膜を挿入するも其刺戟に慣れざる間は耳内壓重の感、疼痛、眩暈等を訴へ嫌忌するものなり、或は人工鼓膜挿入の爲め一度停止したる分泌物再び發すること稀ならず、殊に人工鼓膜挿入の間は屢々耳科醫の手を煩はすものなり、要するに人工鼓膜は世人が想像する如き好結果あるものにあらずして世俗其卓效を賞し濫りに人工鼓膜挿入を強請するは笑ふべく憫むべき次第なり。

第七章 耳病と他疾患 傳染病と耳病

耳病の原因種々ありと雖も傳染病に因て發するもの頗る多數なり、就中流行性感冒、實布垓里、疫咳、腸窒扶私、麻疹等は恐るべきものにして、流行性腦脊髓膜炎、猩紅熱、肺結核の誘因となること多し、傳染病が耳病を惹起する状態は通常直接と間接の二途にして、直接には總ての傳染病例之腸窒扶私、流行性感冒患者の病毒、人體中の血液を通過して耳内の一定處に這入し中耳の病變を喚起するものにして、絶對的に之を排除するは頗る困難なり、また周圍の炎性浸潤より傳搬するもの稀ならず、間接には麻疹、痘瘡、猩紅熱、腸窒扶私、結核の如きは最初鼻腔及鼻咽腔加答兒を起し其有害なる深呼吸、咳嗽、嚥下作用に伴ひ歐氏管を通過して

中耳に波及し化膿性中耳炎に陥りて聾となり、遂に頭蓋内に侵入して腦疾患を醸して死亡の轉歸を取ること多しとす、殊に小兒の歐氏管は短大廣濶なるを以て炎症の傳搬容易なり、左に傳染病と耳病の關係に就てピユルクネル氏の調査表を掲ぐれば左の如し

急性中耳炎	二二・六%	實扶的里	三%
感冒	四六%	腸窒扶私	一五%
慢性中耳炎	二六%	猩紅熱	二〇%
感冒	二六%		
麻疹	五〇%		
急性化膿性中耳炎	九〇%	腸窒扶私	三五%
麻疹	九〇%		

實扶的里	二〇%	猩紅熱	一〇%
疫咳	一五%		
慢性化膿性中耳炎			
腸窒扶私	五%	猩紅熱	一二%
結核	八%	實扶的里	七%
麻疹	八七%		

ワイル氏は七千四百九十人の猩紅熱患者中七百六十七人は耳病患者なることを報告せり、然れども我邦未だ斯の如き統計あるを聞かずと雖も若し精密なる調査を遂ぐるに於ては驚くべき多數の患者を發見するならん、

傳染病が直接に耳病を誘發するは血液中に病毒を含蓄するが故に醫師に委するの外科なきを以て之を未發に豫防すると頗る難ければ常

に傳染病に侵されざる様に努むべし、然れども間接に起るもの、多くは耳科醫の施療に依て容易に恢復するを得べし、何となれば總ての傳染病は鼻及咽頭疾患を併發し其細菌性加答兒は嚙下、嘔吐運動は勿論叫號、噴嚏、吃逆運動、咳嗽等に由て細菌を含有する鼻汁、喀痰等を歐氏管を経て中耳内に侵入し易し、殊に注意すべきは我邦の習慣として鼻汁を除去せん爲め紙又は布片を以て兩鼻孔を覆ひ或は不適當なる鼻洗滌は強く鼻呼吸を營むを以て鼻咽腔内に高壓を加へ細菌を含む不潔の鼻汁を歐氏管より中耳内に竄入し恐るべき耳疾患を惹起し、又俗に添乳と稱し、生母、乳母に係らず乳兒を抱き側臥の位置に哺乳しつゝ、睡眠する慣習も能く一側の耳疾患を換起す、故に余は本邦小兒の鼻咽腔粘膜加答兒を患ひ鼻汁を漏出するもの多きときは勉めて鼻汁を頓に鼻出せしめず、軽く之を清拭し或は之を口内に啜り更に喀出すれば容

易に防禦するを得べし、殊に肺及喉頭結核は常に喀痰困難、咳嗽頻發して歐氏管より有害なる分泌物中耳内に竄入し危険なる耳疾患を誘起するは余の屢々實驗する所なり、之等は醫療に由て常に喀痰を容易ならしめ兼て咳嗽を輕快せしむること緊要なりとす。

眼病と耳病

耳病中腦の疾患を合併するものは硬腦膜外滲膿、小腦膿瘍、竇の腐敗性凝固、腦膜炎等にして屢々視神經炎、乳頭炎等の眼底病を併發すると稀ならず、嘗てグラデニゴ氏は耳病に腦疾患を合併せるもの百七十五人中、九十人は眼底異常を認め、小腦膿瘍、乳頭炎、竇の腐敗性凝塞は六%、大腦膿瘍は五三%、腦膜炎は四九%、硬腦膜外滲膿は四一%なることを報告せり、シユワルツエ氏は腦膜外膿瘍十一例中二例は眼底變化、三十例中

十五例は眼底の變化を呈し、二三三%は視神經炎、三三%は乳頭炎を呈し、結核性腦膜炎四例中二例、大腦膿瘍十二人中六例、小腦膿瘍七例中五八の眼底變化を報告せり、是等は兩側なるあり一側なるありと雖も、多くは耳病を患ふる側に於て著し、故に其未だ腦内に侵入せざるに先つて治療を受くるは極めて必要なるのみならず、眼病と耳病は其の如く親密の關係を有するものなれば速に耳科醫の診療を受くるは勿論、兼て眼科醫の診斷を乞い敢て治療を遲滯せしめ危険の不幸を招く如きは最も謹慎注意を要すべき事なり。

鼻及鼻咽腔疾患と耳病

鼻及鼻咽腔疾患は耳病と親密の關係を有し、屢々中耳の病變を誘起するは吾人の最も多く目撃する處にして、寒暖の變動は粘膜充血を起し

細菌の發生に好培養地を與ふ、殊に腺病質、體質不良の小兒は寒日に侵され易くして鼻及鼻咽腔疾患を喚起し、鼻腔狹窄閉塞及副鼻腔、眼の疾患を誘起し漸次其炎を歐氏管より中耳に蔓延し化膿性炎を起して聽官機能を失はしめ遂に迷路を侵して聾となり屢々炎症を腦に波及して生命を奪ふに至る、又鼻及鼻咽腔障礙は多く口呼吸を營むが故に常に口腔乾燥し粘膜は細菌に對する抵抗力を減じ不潔寒冷の空氣を吸入して咽頭、喉頭、氣管枝及肺の疾病に著大の素因を與ふるのみならず、顔面殊に鼻の畸形、頭痛、鼻聲、肝聲、理解力減少、言語障害、嗅官、味官の障害、精神上の變化を來たし、反射的の神經障害として呼吸困難の爲め血中に炭酸を吸収し膀胱括約筋を刺戟して屢々夜尿症を發し、咽頭分泌物の喀出困難となり之を嚥下して胃腸の疾患を惹起すると稀ならず、故に中耳及歐氏管の健康は鼻及鼻咽腔の状態に關す、何となれば中耳及歐

氏管の疾病は通常鼻及鼻咽腔疾患より續發するもの多ければなり、茲に注目すべきは鼻咽腔腺増殖症一名咽頭扁桃腺肥大症又ルシユカ氏扁桃腺肥大症に續發する聽力障害は通常二〇%乃至二五%にして試みに患者をして、明所に於て口を開き咽頭を窺ふときは口蓋扁桃腺、舌根扁桃腺、咽頭扁桃腺を連繫せるワルダイエル氏扁桃腺環を観るを得る、鼻咽腔腺増殖症は七歳乃至十五歳の兒童を侵し之を放置するときは大人に於ても屢々顯はる、嘗てマイエル氏は二千人の兒童中二%、フレンケル氏は〇九%、グラデニコ氏は六十八人中六〇%、ハルトマン氏は二〇%、岡田博士は一五%、フーゴツエウ、ヤンゲル氏は該病と聾啞の關係を調査し七〇%なることを報告せり之に因て見れば鼻咽腔増殖病と耳病との關係如何に多きやを知るべし、殊に注意すべきは鼻及鼻咽腔疾患を有するものは速かに適當の治療を加ふれば決して不良の

結果を貽するものにあらず、思ふに従來斯の如き病症に對して姑息的
 價値なき療法を施し永久保全の根治的療法を行はざるは甚だ遺憾の
 至りなり、故に之が保全の目的として學校醫をして兒童の耳病及原因
 を研究せしめ、已に耳病あるものは耳内に水液浸入の恐れある所業を
 禁止せしめ、常に寒暖の變動に注意し、喫煙、飲酒を慎むこと頗る須要な
 りとす。

齒牙疾患と耳病

齒牙疾患と耳病との關係は頗る親密なる關係を有し、齒牙より起る耳
 の刺戟症狀は乳齒と永久齒とを問はず生齒期に發すと雖も、就中乳齒
 生齒期を最も多しとす、ドクトルブルンス氏は齒牙疾患と耳病患者五
 十例に就て殆んど同側なるを報じ、ドクトルセキストン氏は齶齒又は

齒牙疾患に因する耳病は齒病を治療せし結果多くは治癒せることを
 報せり、余は耳痛患者にして其原因何たるを知らず偶々抜齒後鎮痛せ
 しものを實驗せり、齶齒に因する反射的耳痛は甚だ劇烈にして頗る堪
 へ難し、元來齒牙刺戟に因て起る反射的耳痛は齒牙の壓迫を三叉神經、
 末梢に波及し迷走神經、舌咽神經は咽頭、歐氏管及中耳に分佈するが故
 に直に中耳に滲出物を生ずるに至る、然らば中耳疾患は其時期の如何
 を論せず速に治療を加ふるは勿論、常に齶齒に注意し決して生齒發育
 と同時に消散するが如き觀念を有せず、直に醫師の診査を請ひ病原を
 確め不測の續發症を防禦する事を努めざるべからず。

消化器疾患と耳病

消化器病と耳病も亦極めて親密なる關係を有す、耳病より消化器病を

發し消化器病より耳病を起すことあり、嘗てメーロル氏は四十三人の胃病患者中十七人を除くの外は耳鳴と聴力障害ありしも胃病の治療と共に耳病の症状消退せる事を報告せり、胃病殊に剩酸過多症に因て起る耳鳴は反射性にしてブリーゲル氏、金杉博士は出血性中耳炎の爲め血球溶解して色素吸収せられ黄疸の原因をなすと報告せり、ハルトマン氏は小兒の中耳炎は腸疾患を來し易しと、胃病より起る耳の障害は多くは中耳硬化、聽神經削瘦、迷路貧血、其他營養障害にして小兒は歐氏管短小なるが故に吐乳若くは嚥下の際に於て乳汁、歐氏管を通過して中耳に竄入し恐るべき急性中耳炎を惹起す、之に反して哺乳兒の急性中耳炎は歐氏管より胃中に膿汁を嚥下し遂に消化不良を誘發す、斯の如く消化器病と耳病は親密なる關係を有するを以て耳病は速に専門家の治療を請ひ兼て口内疾患、食道灼熱の感、吞酸、嘔吐、嘔氣、

頭痛等の症状あるものは胃腸病専門家の診察に依て病源を確むることに努むるを肝要とす。

泌尿器疾患と耳病

腎臟疾患に聴力障害を併發することを報告せしはライエル氏にしてジイウラホイ、ピーゾート、アクベルト諸氏は七十二人の急性腎臟病患者中聴力障害を併發するもの三十六人を實驗し、モルフ氏は最も著明なる三例を報告し、シュワルツエ、ブツクの二氏は腎臟病と中耳出血との關係を報告せり、其他ブルクネル氏は慢性腎臟炎と急性中耳炎の二例、フォス氏は猩紅熱性腎臟炎と中耳病の關係を記載せり、斯の如く腎臟と耳病との關係は頗る親密にして、要するに腎臟病に來る聴力障害は尿毒病の前驅症或は其症状の一部なりと云ふ、然らば腎臟病と耳病の

關係は世人の想像より遙に多くして診断上大いに價値を有するものなれば極めて精密なる耳鏡検査に依て適當の治療を受くべし。

梅毒と耳病

梅毒が父母より子孫に及ぼす影響は頗る大にして管に體力薄弱發育不全なるのみならず、直接に其病毒を遺傳し遂に貴要の臓器に梅毒變狀を發し不幸死の轉歸を取るもの稀ならず豈に恐れざるべけんや、醫學士淺井健吉氏は耳疾患者三千人中聽器梅毒三十七人耳數五十三其内、外耳七、中耳三十、内耳十五、詳言すれば外耳疾患にして中耳を兼るもの二、内耳を兼るもの二、中耳疾患にして内耳を兼るもの十二、内耳疾患のみもの十七、故に人數よりすれば三千人に對する三十七人は一分二三となり、之を外國の文獻に比較するにブツク氏は四千人中三十八

シユベルト氏は二千人中四十三人、ハウグ氏は一萬人中二百六十七人即ち多きは二分六七にして少きは七厘五なるを以て余淺井學士の統計は諸家の中間に位す、尚ほ先天性と後天性とに區別すれば左の如し。

後天性梅毒

外耳疾患合計六 内譯

耳 輪 初期感染 一

第二期 一 (丘疹症)

外聽道五

第三期

四 深部的

骨部的

中耳疾患合計十五 内譯

第二期 一 (丘疹症)

鼓 膜 二

第三期 一

第一期 一 (歐氏管「ブーシ」ニヨル)

歐氏管四 其二期 一 (丘疹症)

第三期 二

急性加答兒

慢性加答兒

急性炎

慢性炎

鼓 室 七 第三期

乳嘴突起 二 第三期

内耳疾患 三十一 内譯

第二期 八 第三期 二十三

先天性梅毒

一歳より八歳まで

四人(内中耳のみ)のもの 四外中耳を伴ふ

もの二

八歳より十五歳まで

三人(内中内耳を伴ふもの二内耳のもの二)

十五歳より二十歳まで

二人(内内耳のもの一 中内耳を伴ふもの

一)

不明

一人(内中耳を伴ふもの二)

斯の如く梅毒と耳疾患の関係頗る大なるが故に梅毒は初期に於て充分の治療を施して速に全治せしめ、其既に聴器の障害を發起するに至つては精密なる醫師の診査に依て其原因を確め直に適當なる治療を施すべし。

第八章 耳病の注意

耳病患者は一般病者の如く衣服、食物、住居、氣候、職業等に著大の關係を有するが故に、此等諸般の有害なる感應は速に除去せざれば病勢を増進するの恐れあり、耳病は屢々體質變常或は他諸臟器疾患に續發し或は併發するもの多きは前章既に述べたるが如し、金杉博士著の耳科學に曰く、一般體質薄弱、貧血、脈病、神經衰弱、痲質斯等には轉地法、浴治法、等を爲しめ兼て肝油、鐵劑、規那劑、沃度劑等の持續内用を命じ以て體質を變革強壯ならしむるを要す。

耳病に注意せしむべき條件は凡そ左の如し。
居室は乾燥にして通氣善良なるべし、殊に睡眠室に於て然りとす。
群集雜踏の場所に居らしむべからず。

衣服は輕易にして廣潤暖和清潔なるべし。

飲酒及喫煙は之を嚴禁すべし。

便秘あるものは常に下劑を投じて適宜の便通を得せしむべし。

頭部充血の僻あるものは下劑を投じ適宜に腸管に誘導すべし。

精神の感動は總て之を避くべし。

感冒に罹り易きものは能く頭部及足部を冷却せしめざるを要す。

他諸臟器の疾病は之を避け或は防禦するを要す。

最も注意すべきは總て耳病者の治療は常に迅速なるを要す、殊に加答兒性及化膿性中耳炎は治療甚だ緩慢なるのみならず、鼓膜穿孔、肥厚、石灰變性、萎縮、癩痕癒着、聽骨關節癒着の如き續發症を發する者は殆んど治療する事稀なり、加之ならず化膿性の者は頭蓋腔に接近するが故に其炎を腦及腦膜に波及し、不幸死の結果を來し或は炎を迷路に波及し

常に不治の全聾を喚起す之れ耳病の治療は迅速を要する所以なり。

耳科衛生終

明治三十九年一月廿六日印刷
明治三十九年一月廿六日發行

耳科衛生奥附

正價金參拾五錢

編述者 今井 亥三 松

廣島縣廣島市猫屋町

發行者 小立 政德

東京市本郷區春木町三丁目廿二番地

印刷者 仁科 衛

東京市日本橋區藥研堀町三十三番地

印刷所 厚信 舍

右同所



發行所

東京市本郷區春木三丁目

南江堂支店

(電話下谷五七番)

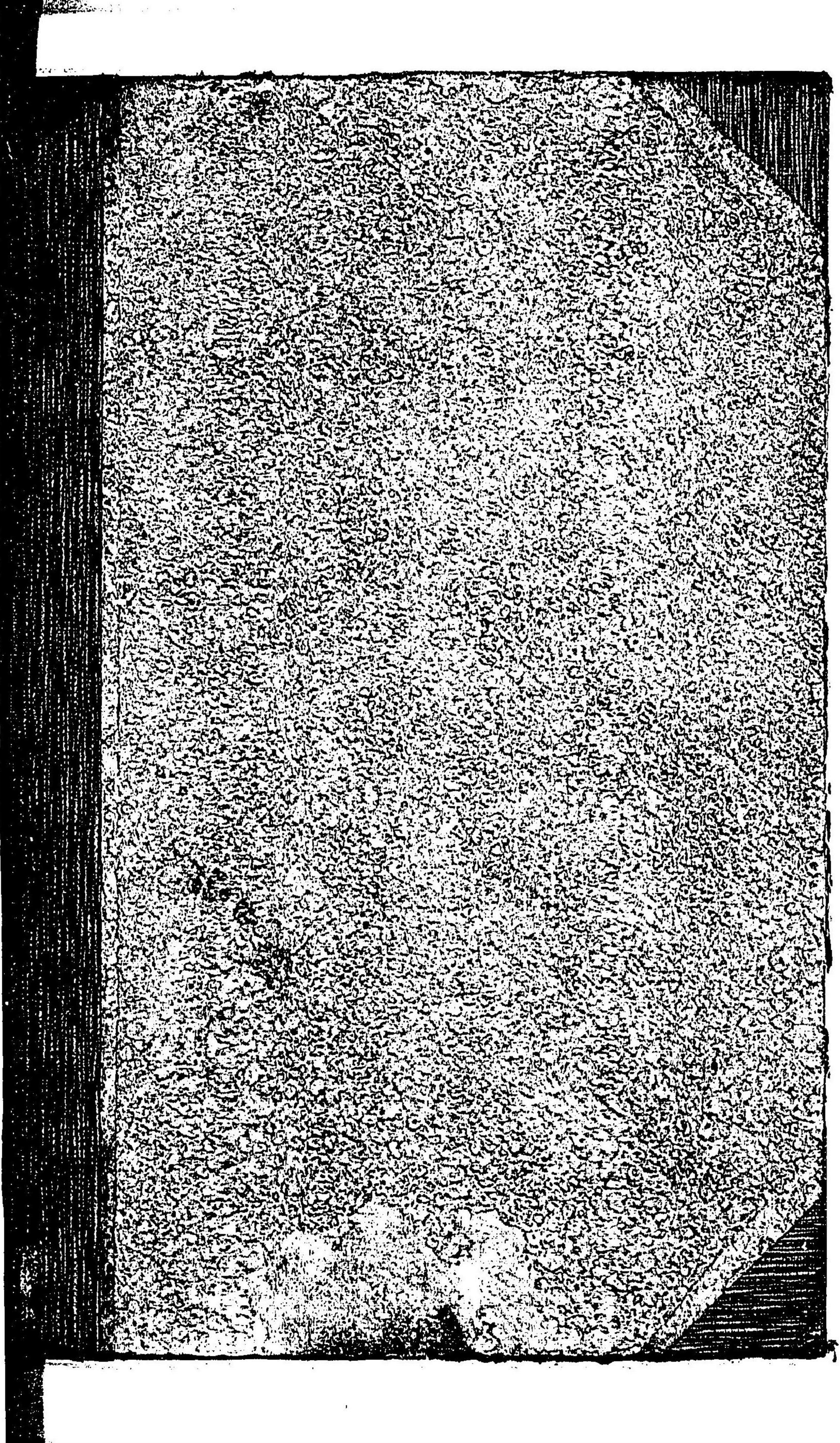
市內賣捌書店

日本橋通り三丁目	丸善書店
本郷龍岡町	吐鳳堂書店
同 春木町二丁目	半田屋書店
同 湯島切通	金原書店
同 元富士町	明文館書店
同 春木町三丁目	積運堂書店
同 同町三丁目	穆々堂書店
同 元富士町	豐文堂書店
同 元富士町	文光堂書店
同 龍岡町	朝陽堂書店
同 龍岡町	南山堂書店
同 龍岡町	根津書店
同 本郷六丁目	岡崎屋書店
神田區表神保町	東京堂書店

各地賣捌書店

大阪市南區心齋橋筋二丁目松村九兵衛	丸善支店
同 市久寶寺町	若林茂一郎
京都市寺町通二條下	宇都宮書店
金澤市片町	安中集榮堂
長崎市引地町	藤崎祐之助
仙臺市大町五丁目	金英堂書店
同市新傳馬町	多田屋支店
千葉縣千葉町	丸屋書店
名古屋市中本町三丁目	渡邊宗次郎
岡山市中ノ町	積善館支店
廣島市鹽屋町	積善館支店
福岡市博多中島町	長崎次郎
熊本市新町二丁目	

58
21



58
21

060138-000-9

58-21

耳科衛生

今井 亥三松/編

M39

CBK-0014

